

# 遠友だより

発行  
札幌遠友塾  
自主夜間中学



## ～被爆者として名のりであるまで：金子廣子さん講演要旨～

函館遠友塾代表 菅原智明さん提供



6月7日に「北海道に夜間中学をつくる会総会」にて1945年8月6日に広島にて被爆された「金子廣子さん」が講演してくれました。そのおりに遠路にもかわらず参加頂いた函館遠友塾代表の菅原智明さんが、函館の生徒さんやスタッフに伝えたいと、1時間余りの講演を要約してくれました。ご紹介致します。

広島で被爆。当時5歳。両親は秋田県出身で台湾に招かれ仕事をしていたが、戦況悪化のため、父が広島で仕事をするようになり、そのとき自分が生まれた。姉が4人、兄が1人。父はまた女の子かということで、名前を考えてくれなかった。出生届の期日があったので、広島で生まれたから廣子と母が名付けたと後で知った。自分は父から愛情を受けていないと感じていた。

原子爆弾の記憶は少ないが、朝に着替えをしたところで原爆が落ちた。縁側近くにいた父の両腕に大量のガラスの破片が刺さり、出血がひどかった。長女が父を負って2kmほど離れた日赤病院に運び、医者に「出血で助からない」と言われたが、なんとか止血処置してもらい家に戻った。当日朝に3女のお姉さんは学校に行きたくないと言っていたが、長女のお姉さんが学校に行くように促し、学校に行き被爆した。3女のお姉さんに会いに行くと、会館のような場所、むしろに寝かされていた。背中火傷がひどいのだが仰向けに寝かされていたことを覚えている。1週間後くらいに3女のお姉さんは亡くなった。その日、会館に着いたときにはお姉さんはすでに死んでいて、母がお姉さんの手を組ませているところだった。母がお姉さんの手を触ってあげると私に言った。組まれた両手を触ろうとしたとき、お姉さんの両肩からウジ虫がわいて出てくるのを強烈に鮮明に覚えている。

戦後は親戚を頼り秋田県生保内に家族で移住。小学校の同級生からは「こっちに来るな」と言われた。このときは健康だったので、そのようなことを言われるのはなぜなのか理解できず、人生で一番辛かった思い出。父が亡くなり、北見紋別で暮らしているお姉さん（長女）のところで暮らすことになった。しばらくすると、母は仕事を探しに札幌に一人行ってしまった。お姉さん家族の目があり、自分

はやっかいものという気持ちから、食事を遠慮するようになり、ガリガリに痩せてしまった。お姉さんも子供が多くて生活が苦しかった。母に何度も手紙を出して、札幌に早く連れて行ってほしいと連絡していたようだった。

小学5、6年生のとき、札幌に呼ばれた。母と一緒に暮らせると喜んでいたが、行ってみるとおじさんの家で暮らすことになっていた。母は住み込みで仕事をしていて同居はできないようだった。ある日の夕方、おじさんに「ご飯がないよ」と言うと、ただ「そうか」という返事だけだった。結局夕食なし。自分はここでもやっかいものなんだ、と感じた。

その後、母は親子で住み込み可能な職場を探して一緒に住むことができるようになった。うれしかった。一度、母に「あんたさえいなかったら」と言われてショックだったこともあった。高校に行かせてくれとは言えず、中学卒業後は昼間働き、夜は洋裁の学校に通った。自分の食いぶちは自分で稼ごと働いた。住み込みで働きたいと考えていたら東京で働かないかと誘われ東京に行くことにした。東京オリンピックの翌年まで東京で仕事をしていたが、過労なのか病気なのかはっきりしないが、職場で倒れてしまい、札幌に戻ることにした。中学生の15歳のときに札幌で知り合っていた方と結婚することになった。子供は2人。

語り部をするようになってから、小学校で話をした後、小学生の質問で、放射能影響の心配があったのにどうして子供を産んだのか、と聞かれて答えに窮した。結婚したら子供を産むものだと思っていたから、産まないということは考えていなかった、と小学生に答えた。後で旦那にそのことを話したら、彼は子供のことで結婚当時心配だったので、医者に相談したことがあると言っていた。医者は産まない方がよいのではとの回答。今になってわかったことであるが、確かに被爆2世に影響があるらしく、現在病気で苦しんでいる被爆2世も多い。

私はこれまでやりたいと思ったことをやってきた。遠友塾のことを知ったとき、ここで学びたい、その後は夜間高校にも通いたいと思った。遠友塾で勉強することはできたが、卒業の年に病気になり、高校入学は断念せざるを得なかった。健康だったらと思うと残念。

東日本大震災をきっかけとして語り部になった。あるとき被団協の事務所で、原爆孤児の写真をよく見る機会があった。私は孤児にならなかった。養子にもだされなかった。(養子の話は何度かあったようであるが)生活苦の中でも母は、何とかして母子で暮らせるように、最大限努力していたのだと理解した。母が高齢になり施設に入るようになったころ、私が小学生のとき「あんたがいなかったら」と言ったよね、と母に言うと、母は「そんなこと言うはずがない」と怒った。言った方は忘れてしまう。言われた方は一生傷が残る。だから皆さんはひどい言葉を言わないようにしてほしいと思います。以上まとまりがないのですが、自分史についてお話ししました。